

現代日本における家族を持つことの意味

——小学生のいる女性へのインタビューから——

早稲田大学 品田知美

1. 研究の目的および背景

現代日本では家族の関係性とかかわる多くの問題が析出している。特に合計特殊出生率の低さについては多くの議論がなされ、政策や制度的な改革は進展しつつある。だが、制度がジェンダー中立的に設計されたにもかかわらず硬直的な性別役割分業体制は堅持され、変化は緩慢である。人々の意識と制度の間にはどのような齟齬がありどこが変化の端緒となりうるのだろうか。

本研究では、現代イギリスにおける家族との比較を踏まえながら、現代日本で小学生を育てている女性たちの家族と過ごす日常生活についてインタビュー／観察を行い、価値意識の違いを理解することを目的とする。

2. 研究の枠組みと方法

インタビューは2018年2月から3月にかけて、報告者を含め3名で実施した。対象者は調査会社によるWeb募集により7名、知人を通じた紹介により3名に依頼し、半構造化インタビューを1時間程度行った。内容については、日常生活の過ごし方全般や家族生活と仕事の調整のしかたなどに加えて、人生や子どもの教育への考えかたなど先立って行われた「イギリス調査」(品田 2018)と同じ設問で実施した。分析方法はインタビュー記録を文字に起こしたうえで内容分析とし、インタビュー先での観察および室内写真の記録をもとに解釈をした。

3. 結論および考察

本研究は出生率の低い首都近郊で小学生を育てている女性の語りを、内容分析において5つの原則を課した上で論点を抽出した。

まず「家族」という言葉から女性が意味する成員は主に「子ども」に偏っていた。夫は必ずしも共に時間を過ごしたい対象として認識されていない。現実としても夕食時に夫がいる家族は極少なく、イギリス調査とは対照的である。また、家族とよく話すかどうかについて聞くと「子ども」との一方的な会話状況が語られた。ただし、この現状は「家族と現在十分一緒に過ごしている」と認識されていた。つぎに、よく知られているように仕事をしている／していないに関わらず、家事育児はほぼ妻が担当している。どうしても人手が足りない状況が発生すると、遠方から妻の母親が呼び出される。妻方同居への移行はその距離を解消する解決策の1つとして選択されているようだ。社交の範囲も妻方親族のみに限定されていた。さらに、子どものジェンダーによる母親の受容のしかたは顕著に異なり、「男の子なので」「女の子なので」という枕詞が発せられる。母子関係において子どもの性差が再生産され、母と娘のケア関係の持続が指向されている。

分析をとおして浮かび上がってきた現代日本における「家族を持つことの意味」とは、将来世代における家族の継承者をつつがなく育てるユニットとしての機能性に特化され「共に時間を過ごす近しい仲間」であるべき、という価値は重視されていない。収入面を除いてひとり親家族との日常生活面における差異は小さい。妻と夫の関係性は妻が正規職であっても、教育歴が上位であっても変わらず、家族をとりまく社会の価値空間が個別家族の関係性を堅固に再構築しつづけている現状が理解された。

文献

品田知美, 2018, 現代イギリスにおける家族を持つことの意味: 小学生のいる女性へのインタビューから, 第91回日本社会学会大会発表資料.

謝辞 本研究は、文部科学省科研費補助金基盤研究(C) 課題番号 15K03819 による成果である。